

草原がつなぐ人・自然・文化

全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.56 (Oct. 2023)



秋の牧の入茅場（長野県北安曇郡小谷村／小谷村提供）

第14回全国草原サミット・シンポジウム in おたり

全国草原サミット・シンポジウムの進捗状況 (澁谷祥充：長野県小谷村)

令和6年の10月4日（金）、5日（土）に開催される「第14回全国草原サミット・シンポジウム in おたり」の第2回目の実行委員会が9月11日に開催されました。前回、ロゴマーク・スローガンは村内の中学生から募集すると決めていただき、今回実行委員会で郵送による投票をしていただくことになり、投票の結果、決まりました。ちなみにスローガンは「“つなげよう” 茅場が育んだ技術と命」と決まりました。

今回はサミット・シンポジウムのより具体的な内容について、委員の皆さんから忌憚ない意見を出していただきました。小谷では草原イコール茅場というイメージがありますが、全国各地の草原に関わる人たちとの論議を深めるために全国的な課題を抽出して、小谷の例を紹介しながら論議できる場にしていくのが望ましいという意見をいただきました。それを基調講演や研究報告、分科会にも反映させていきたいと考えています。

特に一般参加者が論議する場としての分科会については、参加者が話の中にスムーズに入っていける

ことが前提ということで、テーマの設定に合わせたコーディネーターや発表者の人選なども併せて、実行委員会に分科会チームを作って、後日オンラインで論議を深めることにしました。

現地見学会は、より小谷らしい草原の利用方法を体験してもらえるように、茅刈りの実演や茅葺き師の屋根刈りバサミの実演などを検討しています。充実した内容になるように協議を重ねていきますので、よろしくお願いいたします。



茅刈の様子

【書籍】『未来に残したい日本の草原』の発行にご協力下さい！

新たに「未来に残したい草原の里100選」に選定された、全国14箇所の草原の里を紹介する書籍の発行を計画しています。現在、発行に必要な資金を集めるため、クラウドファンディングで協力を呼びかけています。

会員のみなさまのご協力を頂きますとともに、お知り合いの方へのお声がけなど、ご協力をお願いいたします。

詳細はこちら

<https://camp-fire.jp/projects/view/682753>





第14回 全国草原サミット・シンポジウム inおたり



牧の入茅場（文化庁設定 ふるさと文化財の森）

“つなげよう” 茅場が育んだ技術と命

草原に関わる人々が集い、希少となった草原の価値や存在を全国にアピールするとともに、自然や文化的な知識や技術を共有し、全国各地の保全・継承活動の現状や課題について論議を深めながら、草原を未来に残すため連携を図ることを目的として、開催します。

開催概要

会場 小谷村白馬乗鞍 白馬アルプスホテル

1日目 2024年10月4日（金）

2日目 2024年10月5日（土）

「未来に残したい草原の里100選」 認定書授与式

シンポジウム 草原・茅場に関する基調講演会

日本茅葺き文化協会代表理事 筑波大学名誉教授 安藤邦廣先生
ゲスト：小谷村の茅葺き師 松澤敏夫 氏

研究報告

信州大学教育学部 教授 井田秀行先生

分科会

4つの分科会に分かれてテーマ別に事例発表を行い、議論を深める。

1. 草原の生物多様性
2. 茅刈り・茅葺きの現状と課題
3. 草原の保全活用と安全対策
4. 草原資源の地域づくり

現地見学会の開催

牧の入茅場・雨中ショックの茅場・茅屋根刈りの実演見学等
班に分かれてマイクロバスで移動し、各会場で研修を行う。

サミット 全国草原サミットの開催

草原を有する全国の自治体首長によるサミット宣言の採択。
会場：白馬アルプスホテル

※内容は変更になる場合があります。

詳しくはHPをご覧ください



第14回
全国草原サミット
シンポジウム inおたり

第14回全国草原サミット・シンポジウム in おたり大会実行委員会

お問い合わせ先：小谷村教育委員会

長野県北安曇郡小谷村大字中小谷丙131

TEL 0261-82-2587

Mail sougensummit@gmail.com

「未来に残したい草原の里 100 選」フォーラム

「未来に残したい草原の里 100 選」では、2 回目の募集を行い、新たに全国から 14 の草原の里が選定されました。2023 年 10 月 12 日、東京都内の東京農業大学の横井講堂にて、認定書の授与式、それを記念した講演、選定された団体からの事例報告会

などが開催されました。

認定書の授与式と基調講演の様子について、以下に報告します。草原の里からの報告の様子は、次号のニュースレターでお伝えする予定です。

授与式・選定記念フォーラム報告

(高橋泰子：全国草原再生ネットワーク/NPO 法人緑と水の連絡会議)

令和 5 年 10 月 12 日の午後、東京農業大学の横井講堂で、「未来に残したい草原の里 100 選」の第 2

回認定書授与式の開始が告知され、フォーラムが開催された。

主催者および来賓あいさつ

主催者および来賓あいさつは以下のとおりであるが、各省庁が草原環境およびその活用に大きな期待を持っていることを強く感じる挨拶であった。

全国草原の里市町村連絡協議会会長 中村義明氏

長野県小谷村は、新潟県との県境にある。梅池高原、白馬スキー場、そして温泉が沢山ある人口 2,700 人の村で、来年第 14 回全国草原サミット・シンポジウムを開催する。今年 4 月、前任より会長を引き受けた。草原 100 選は 2021 年全国草原の里連絡協議会で事業として決議され、第 13 回の東伊豆で第 1 期募集のアナウンスを行い、2022 年 3 月に 34 の草原の里が選定された。今回 14 の草原が加わり、あわせて 48 か所が認定された。社会的認知度を上げ、農業・文化・環境など様々な恵みをもたらす草原のある里を再発見し、その魅力を広く紹介し、希望ある社会を残していく。期待される効果としては、社会的に認知されない草原を掘り起こし、草原の価値

を知らない人に知らせ、草原にかかわっている人の意識の向上に貢献し、火入れや茅葺き等伝統文化の担い手を位置付けしていくことが狙いである。この度、趣旨に賛同し 100 選に応募し認定されたことは、皆さまの草原に対する取り組み等の努力の積み重ねが評価されたものである。100 選の仲間として、各草原の課題や取り組み等を情報交換し、交流を行い、広く国民の皆さんに全国各地の草原の魅力、公益的役割りを発信し、草原を核とした地域づくり、地域活性化のために尽力して欲しい。また本日より草原の里 100 選の第 3 期募集が始まる。全国各地の草原の里からの応募を期待している。また、本事業が広く発展することを願う、と挨拶された。

東京農業大学 地域環境科学部長 大林宏也氏

草原 100 選の第 2 回授賞式、フォーラムをお祝いする。コロナが明けたとはいえ、外からの客を迎えてのフォーラムの開催は久しぶりである。地域環境



中村義明会長のあいさつ



大林宏也学部長のあいさつ

科学とは山の上から海辺までを網羅している。草原は山麓にあり、地域環境科学部は職員や学生が、植生や生態を調査していて身近なところ。農大関係者にもふさわしいテーマである。今回、国際センターが開設して農大の資産を皆さんと共有できるのはうれしい。今回選ばれた草原を加え、48の草原を多くの人に訪れてもらい、互いのプラスになればいいと思っている。

環境省自然環境計画課長 則久雅司氏（代読 石川拓哉氏）

草原100選第2回授与式、選定フォーラムおめでとう。かかわったすべての皆さんに敬意を表する。環境省は今年3月新たな生物多様性国家戦略に基づき2030年までにネーチャーポジティブ社会を実現することを目指し取り組みを進めている。中でも核になるのが2030年までに陸と海の各々30%までを保全するサーティバイサーティの目標を作っている。この達成のためには国立公園等保護地域の拡充とそれ以外の民間の取り組みによって保全を進めていくことが重要である。今年度、民間との取り組みによって生物多様性が図られている場所を「自然共生サイト」として認定するしくみを開始した。今までに120の自然共生サイトが認定された。今年度中に100か所の認定を目標としている。企業や、NPOなど予想を上回る応募があり、最初の受付により達成した。また、中央審議会の小委員会においてネーチャーポジティブの民間活動の促進方策に関する議論を開始する。ネーチャーポジティブに対する社会的関心の高まりを感じ元年ともいえる状態を追い風に、

「自然共生サイト」の認定やの民間活道の促進の策の検討を進める。草原100選と自然共生サイトは親和性が高い。実際サイトの中にも草原100選に選ばれた地域があると聞いている。環境省として本日の議論を聞いて草原の里の多くの地域と連携して私たちの共創資産を保全再生・持続活用していきたい。今大会が有意義なものになることを祈念する。

農林水産省農泊推進室長 村山直康氏

農林水産省は、草原など地域資源を活用するところであり、今回の開催をお祝いする。産業の活性化と草原の里100選の趣旨は合致している。草原は美しい景観と共に牛馬の飼料提供地となり農業と密接に関係している。また、茅葺きのカヤを提供しているところでもある。個人的には阿蘇の野焼きボランティアに参加しているが、どのようにして次世代につないでいけるのか、伝えられた財産をいかに残していくかが課題と思う。農山漁村を楽しむ農泊は旅行者に食や景観を楽しんでもらうことで所得の向上につなげていくことを目指している。今回の草原100選によって草原の魅力を再認識し、草原の保全にしっかりとかかわっていきたい。今回の開催をお祝いして挨拶とする。

主催者および来賓あいさつは以上のおりであるが、各省庁がそれぞれの立場で草原環境およびその活用に大きな期待を持っていることを強く感じる挨拶であった。また、本年度は3省に加え、本フォーラムへの文化庁の後援をいただいたこともそれをうかがわせるものである。

基調講演「草原と茅葺きの持続とその暮らし」（筑波大学名誉教授 安藤邦廣氏）

昨年は、草原の成立について湯本先生からお話しいただいた。草原という環境に加え、今回は資源という観点から、有益な建築資材供給の場としての草原を評価していかないと草原は存続できないと思う。人類の生活を支えてきた草と木。両輪であるが、今は森林の資材、活用はこの横井ホールを見ればわかるが、草に関しては微塵もないのが現代社会である。そこで、草原の持続を考える際には資源としての草原を評価していかないといけない。スライドの遠くに見えるのは吾妻富士。ぬる湯温泉という巨大温泉の基地である。山男の集う場所として汗を流して地域を力強くまわしてきたということを、活動を通じ

て実感した。



安藤邦廣名誉教授による基調講演



これは富士山麓、演習場のススキの草原、茅場だ。「火山に草原有り」日本の農家の70~90%は茅葺きだった。8,900ヘクタール。かつては全国に最低500万棟茅葺き屋根があったが、今は1%に減っていて、それに比例して草原が減っている。世界には茅葺き家屋が少ないが、なぜ日本に茅葺きが普及し、茅葺き王国になったのか。そこには必ず草原の存在があり、火山がある限り茅場が復活する。一方、同じ気候の風土の韓国はそれほどではない。長年「韓国には茅葺きがないのか」と思っていた。大火山の爆発のあとに茅場ができる。茅葺きの始まりであって源でもある。有数の火山列島、草原の環境、そして茅葺きの文化があることが改めてわかる。

カヤの循環的複合的利用

草原100選に認定された富山県にある五箇山。この素晴らしい点は草原建築、循環的営みが残されている。ほぼ昔通り、草原を考えるうえでヒントと手掛かりがある。形ではなくその営みが世界遺産なのである。

茅場は1戸当たり2~3反部(2,000~3,000㎡の茅場)で、焼き畑農耕の跡地が茅場になった。山の上の方にある茅場は、一年に一回の刈り取りなので、多少遠くても刈りにいける。この急斜面に図体の大きな木を植えると防災上芳しくない。草の方が体の割に根が大きいので、がけ崩れ防止など防災上利点があり、草原として利用されている。カリヤスは中空で、秋に茎が固くなったときに刈り取る。刈りやすいのでカリヤスといわれている。屋根材としては細くしなるものがよく、50年くらい持つ茅葺きとなる。

秋10月、毎年夫婦で2週間ほどカリヤスを刈り取り運搬する。雪が降る前の10月に刈れるのが大事なことで、雪が多いところはよく使っている。ススキは10月ころはまだ緑色で、12月にならないと

枯れ上がらないので、早くには刈れない。11月までには刈って家を囲む。

1) 雪囲い 刈った茅は乾燥を兼ねて家の周りを囲み、断熱材代わりとなる。

2) 屋根ふき 夫婦で2週間刈った茅の量で屋根の6分の1を葺くことができる。20年で一周する。屋根は高いけれど、それで巨大な合掌造りを守れると思えば構造的な経済を考えれば見合う。しかも、使い終わった後の茅は全部集めて、昔は桑畑に入れていた。

3) 肥料 屋根から降ろした茅はびっくりするほど傷んでいない。茅は毎年とれる。採れただけ屋根を変えるということ。つまり古くなったから変えるのではなく、畑の肥料にするために毎年変えている。畑に入れてだけ桑が萌芽し、養蚕が可能となり、これが300年間続いている。毎年2週間の労働がこれを支えている。しかし、五箇山も昔と今は違ってきた。今は茅で屋根を葺く必要が無くなり、茅葺きは半分くらいになったが、それでも古茅は有機野菜栽培に利用し、農泊の旅行者に提供されている。

カヤ(カリヤス)のカスケード利用と炭素の循環

牛が1~2反歩のカヤ場の草で飼われ、それもエネルギーは茅のみと考えると、草資源はかり知れないパワーの源である。自分は学生や外国の人をここに連れてゆく。茅葺きに胸がわくわくし、想像力が掻き立てられ、いろいろなヒントを得る。若い人など10~20人が高齢の方の指導を受けワークショップなどで作業ができる。鎌一つさえあれば参加でき、誰が来ても危険がない。

茅葺きの良いところは家の中で火をたくことができることだ。草原は豊かな生物多様性がある。茅葺き屋根も生物の宝庫で、微生物から昆虫、蛇、鳥などみんなのお宿。これらは人間にとっては厄介で何

かバリアが必要になる。このようなところで健康に暮らせるのは火をたくからである。内側に煙のバリアが張られ、抗菌性があるので動物はよってこない。茅葺きを中間にして、人間と生物がすみわけしている。茅葺きは奇跡的なものなのだ。

土を肥やす茅の力

火山灰土壌は豊かな土壌ではない。なぜ黒ボク土で農業ができるかというと、茅をすき込み、延々と土づくりを続けているからなのだ。萌芽するものは茅を入れないといけない。

お茶畑には絶対に茅を入れないといけない。化学肥料での栽培は3年で土が劣化して良い芽が出なくなる。桑畑は毎年萌芽しないといけない。

東伊豆のミカン畑では新しいわらをミカン畑に敷いている。

新しいわらもったいない。昔は茅葺きの藁をカスケード利用していた。このように経済を3分の1で回せた。細野高原はミカンで儲かったのが今はこのようにしている。

りんごの受粉ができず、手作業でしていた。このカヤ束を誰が買うかというと、リンゴ農家がマメコ



バチの巣にするために買ってハチの住みかになっているのだ。

茅を刈って屋根を葺くと30年は炭素固定する。

これからは茅を現在の建築に使っていく必要がある。屋根は規制があるので難しいが、外との断熱材や壁に模様を付けたりと、住宅を基本にした民泊などの内装に使うには全く問題がない。痛んだらそこだけ直せばよい。海外でもそれが自然になってきている。このような取り組みで草原が維持されることを願っている。

認定書授与式および一分間スピーチ

今回認定された14の草原の里に対し、全国草原の里連絡協議会会長が認定書を授与。記念写真撮影後の代表の一分間スピーチは次の通り。皆さん、自分関わっている草原の里を誇りに思い、また、そこでの課題を他の草原とつながることで解決もしていきたいとの思いが溢れるものだった。

安比高原（岩手県）

ノシバを復元したいと20年前から活動の任意団体。最近では都会からのボランティアが中心となり活動しているが、5~6年前から馬の放牧と、短期間の牛の放牧を始めた。国有林であるのでかつてのような経済活動はできない。あくまで草原維持復元手段として、原点回帰で牛馬放牧をしている。これが楽しい。

冬師湿原（秋田県）

雄大な鳥海山をバックにしている大草原。過去から大勢の方に来てもらっている。守っていきたい。



認定書の授与

鉢山（福島県）

5月連休に山を焼く方法は、江戸時代からのそのままであるが、300年間無事故なのが自慢である。

玉原湿原（群馬県）

ダムに沈むのを危惧して玉原湿原を守り50年経った。何も保護のネットがかかっていないので日頃からどうしたらよいかと方向性を考えている。草原

100 選認定をきっかけに「森の博物館玉原」として未来までずっと保護していきたいと思う。

田島ヶ原サクラソウ自生地（埼玉県）

サクラソウの自生地であるが、知名度が低いのでたくさんの人に知ってもらうために応募した。

箱根の仙石原（静岡県）

湿原とススキ草原から構成され国立公園の特別保護地区に指定され厳正に保護されている。箱根の重要な観光地である。今はススキの穂が黄金色になり素晴らしい風景になっている。

ドンデン高原（新潟県）

守る会でも保護する会でもなくドンデン高原の自然を考える会である。ドンデンのシバ草原は自然にできたものではなく人の営みが関わってできたもの。人々の暮らしが変わり、シバ草原が佐渡から消えるのであればそれはそれで自然の成り行きかなと思う。しかし、それを良しとせずシバ草原にしたいと思って活動してきた。草原 100 選に認定され自分たちにエールをいただいたと思っている。今後もドンデン高原の未来を考えていきたいと思う。

相の倉集落（富山県）

カヤ場を持つ相倉の住民は日頃から維持管理してきたからこそ 100 選に認定された。自身も茅場を持ち茅刈りが始まると中学生の息子たちも手伝ってくれる。未来の子供たちのためにも相倉集落の茅場をしっかりと守っていききたい。

菅平高原・峰の原高原（長野県）

夏は合宿、冬はスキーと観光利用をしている。菅平は平安時代から草原であるが、最近温暖化で草原が失われてきている。かつての原風景に戻したい。

霧ヶ峰（長野県）

10 年前から霧ヶ峰で活動している。草原の維持に関して 10 年前に協議会が発足して草原再生に尽力している。五里霧中でやっているが協議会を中心に



一堂での記念撮影

さらに草原が子々孫々伝えられるように努力していきたい。100 選に認定された草原同士がつながってさらに連携していければいいと思う。

城と翁とスキーの基山高原（佐賀県）

基山高原には 3 つの特徴がある。①国の特別な指定を受けた山城がある、②希少植物があり、山頂にはオキナグサが群生している、③100 年前より草スキーが盛んな草原であり、5 年前から草スキー世界大会が開催されている。2024 年佐賀国体には特別競技として起用されることになった。草原 100 選認定を契機に多くの人に知って、訪れてもらいたい。

中瀬草原（長崎県）

地元集落・行政が守ってきた草原を引き継いできた。4 年前から民間企業として国の制度を使い、羊を放牧して維持している。草原 100 選の認定を契機に頑張りたい。

五島・鬼岳（長崎県）

五島市は自然と文化・歴史で世界遺産、日本遺産そしてジオパークに認定されているところで、日本でも数少ない地である。鬼岳は五島の海の青色とのコントラストが非常に美しいところ。夜は天の川が肉眼で見え、多くの観光客が訪れる。今後とも自分の好きな鬼岳の保全と活用にしっかりと取り組んでいきたい。

草原をめぐる動き（2023年10月～2024年1月）

- 10/7-8 ～山地崩壊ヶ所緑化のためのススキの種採集とミズナラ林整備（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- 10/7 乙女高原自然観察交流会（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 10/28-29 上ノ原の茅刈り（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- 11/3 茅刈り体験 in 戸隠 2023（場所：長野県長野市戸隠スキー場中社ゲレンデ、連絡先：戸隠観光協会） 11/11, 12 も開催
- 11/11 乙女高原自然観察交流会 草刈り準備（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 11/18-11/19 上ノ原の茅出し（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- 11/19 山焼き準備と茅刈り体験（場所：岡山県真庭市蒜山上徳山地内、連絡先：蒜山自然再生協議会）
- 11/12 八幡湿原の野鳥観察会（場所：広島県山県郡北広島町、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 11/23 乙女高原の草原を守る！草刈りボランティア（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 11/23 千町原の茅刈り（場所：広島県山県郡北広島町千町原、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 11/25 ASO 草原フェスティバル（場所：熊本県阿蘇市小里 阿蘇草原保全活動センター、連絡先：阿蘇グリーンストック）
- 12/2 乙女高原自然観察交流会（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 1/6 乙女高原自然観察交流会（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 1/28 第 21 回乙女高原フォーラム（場所：山梨県山梨市 夢わーく山梨、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 1 月中旬 田島ヶ原サクラソウ自生地の草焼き（場所：埼玉県さいたま市桜区 桜草公園内「田島ヶ原サクラソウ自生地」、連絡先：さいたま市教育委員会 文化財保護課）
- 1/27 若草山山焼き（場所：奈良県奈良市奈良公園内 若草山一帯、連絡先：若草山焼き行事実行委員会事務局（奈良県奈良公園室））
- 1 月下旬 流域連携活動「小貝川の野焼き」（場所：茨城県常総市小貝川河川敷、連絡先：森林塾青水）
- 1 月下旬 流域連携活動「菅生沼の野焼き」（場所：茨城県坂東市菅生沼、連絡先：森林塾青水）
- 1 月下旬 都井岬の野焼き（場所：宮崎市串間市都井岬、連絡先：串間市観光物産協会・都井岬ビクターセンター）

※予定が変更になる場合があります。上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

未来に残したい草原の里 100 選 2023 年度募集中

2023 年度の募集を開始しています。まだ応募をされていない地域のみなさまは、ぜひ応募下さい。また、まだ応募をされていない地域をご存じでしたら、情報提供やチラシの配布など、ご協力をお願いいたします。

詳細はこちら <http://sato.sogen-net.jp/>



全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 56 2023年10月号

一般社団法人全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 378-14
大田市ゲストハウス雪見院内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-86-8899

【編集後記】今春新たに選定された草原の里への認定書の授与式が無事に終わりました。3 期目となる地域の募集を開始しましたので、知り合いの方などへの紹介をお願いします。